

いくつかの出来事を含んでいる。それらは少し触れたが、ジェラルドの数次に渡るアイルランド行やウェールズ行である。アイルランドについては、ジェラルドは生涯のうちで都合4回行っている。初回は1183年で、王室の官吏になる直前であり、2回目は1185年である。そして、この2度の訪問は、イングランド王室に対するジェラルドの反感形成過程を考えると、大きな要素となる。初回のジェラルドのアイルランド行は、自分の一族の者を訪れた旅だったとされる。一族の者とは、第1部で見てきたように、1169年にアイルランドに侵攻し定住した者たちである。このときジェラルドは自分の一番上の兄、マノーピアの領主であるフィリップ・ド・バリと一緒にいった。フィリップは、彼らの叔父であるロバート・フィッツ・ステューブンを彼に与えてくれた南西アイルランドの新しい土地を受領しに赴くところだった⁶⁰。2回目の1185年のときは、アイルランドを父ヘンリー2世より与えられた王子ジョンに同行した訪問で、イングランドの官吏としての公的なものだった。この時ジェラルドに課せられた任務は、アイルランド侵攻以来、そこで定着し根を深く張りつつあったマーチャーたちの動きを見張り、その行動を牽制するというものだった。

しかし、イングランド側の計算とは裏腹に、ジェラルドはアイルランドにおけるマーチャーたちの境遇に同情してしまう。これも第1部でみたように、ヘンリー2世はアイルランド南西部におけるノルマン・マーチャーたちの領土獲得行動を押えつけるために、その地域への王権支配を厳しくした。例えばヘンリー2世による1170年のアイルランドにおける港湾封鎖やマーチャーたちが獲得した土地を没収するという警告は、そうした政策の一端といえる。当然ながらマーチャーたちは、アイルランドで獲得した土地財産に対するイングランド王権の高圧的な介入には我慢がならなかったし、国王やその命令を遂行する王室の官吏たちには憎しみすら抱く。特にジェラルドの一族は、国王から行政長官に任命されてアイルランドに派遣されてきたウィリアム・フィッツ・オードリン (**William fitz Audeline**) の高圧的なやり方に、苦しめられたという⁶¹。もしかしたらジェラルドは初めてのアイルランド行の前から、彼の一族のイングランド王室に対する不満を聞いていたのかもしれない。そして、心の中に反イングランド王室感情のが、アイルランドの現状を見る前から芽生えていたのかもしれない。いずれにしても、この初回と2回目のアイルランド訪問が、彼の反イングランド感情を形成する契機となったのは間違いない⁶²。イングランド側の目論見に反し、ジェラルドのアイルランド派遣は、彼をしてアイルランドの身内であるマーチャー一族に多大な同情を抱かしめる結果となった。そして、まさにこの点に、ジェラルドはまぎれもなくダヴェッドのマーチャー社会を故郷に生まれてきた人間だったということ、我々は再び確認できる。

同様に、ジェラルドの2度に渡るウェールズ行は、ウェールズ人を牽制するための国王の政策の一環だった。今度はジェラルドに流れるもう一方のウェールズの血が利用される。1188年の彼の最初のウェールズ行は、カンタベリー大司教ボードウィンを伴ってのものだった。ボードウィンは1184年に没したジェラルドの理解者であったリチャードの後継者で、そのウェールズ行の目的は第3回十字軍の必要性を説き、聖地に向かう兵員を募ることにあったとされる。だが、真の狙いはウェールズ全ての司教区の聖堂において大衆に祝福を授けることで、カンタベリーの権威を知らしめることにあった⁶³。この、カンタベリー大司教のウェールズ全地域への説教の旅にジェラルドが同行したということは、特別な意味がある。それは、カンタベリーの権威がウェールズに浸透することには、ジェラルドが何ひとつ反対しない、黙認したということである。このことは、セント・デーヴィッツの大司教区問題にジェラルドがこの時期無自覚であったことを証明する以外の何者でもないといえるだろう。事実、ジェラルドはボードウィンとの同行を非常に喜んでいて⁶⁴。

ジェラルドのウェールズ人への意識は、この時期成長が見られなかった。彼は多くのウェールズ語を知っていたし、その言語に興味もあった。だがウェールズ語を話せるように勉強しようとはしなかった。要するにジェラルドはウェールズ人を野蛮だと見なしていたのである⁶⁵。ジェラルドはボードウィンと行ったこのウェールズ全土の旅から帰ると2冊の本を著すことになる。1191年に完成した *The Journey through Wales* と、1194年の *The Description of Wales* である。この2冊には彼のウェールズ人への批判や軽蔑が随所に見てとれる。例えばジェラルドは次に示すように、カンタベリーを賞賛する一方でセント・デーヴィッツには冷淡である。

カンタベリーは国王の好意を享受している。莫大な富と資質に優れた多数の司教たちの奉仕、そして文学や法律に精通した多くの学識豊かな人々の存在。対してセント・デーヴィッツには、こういった優れた点は全く見られない。そのひどい状態への考慮が何もなされていない⁶⁶。

ジェラルドは、驚いたことに、*The Description of Wales*の中のある章で、ウェールズ征服に関する助言さえやっつけてのけている。そして、本当に、それは後のエドワード1世によるウェールズ征服(1284年)の際に、数多くの貴重な情報を与えたとされる⁶⁷。ジェラルドのウェールズ人への態度は、反感というレベルではなく敵対的だったといえよう。けれども、彼にとってはウェールズの王族につながる高貴な血筋は全く別問題で、常にネストの子や孫たちの勇ましさと業績を賞賛していたのであり⁶⁸、この面で彼の態度には矛盾が見られる。

その後1189年にヘンリー2世が没すると、ジェラルドはウェールズへ2度(都

合3回目、4回目になる)送られる。この派遣の目的はイングランド国王死去に伴って不穏な動きを見せようとするウェールズ側を牽制し、和平を維持するためのものだった。この2度に亘る派遣の中で、最初の国王死去直後のウェールズ行はカンタベリー大司教ボードウインの指示によるもので、この時はジェラルドはうまく目的を果たしたといわれている⁶⁹。しかし後の方の1192-93年に亘って行われたウェールズ派遣は、ジェラルドを出せばウェールズの有力者ロード・フリースとの間に友好関係を結ぶことができるとイングランド側が期待したようには運ばなかったようである。加えて、このとき同行したシトー修道士ウィリアム・ウィベルトのジェラルドへの中傷は悪辣で、ウェールズ行より戻ってきた直後から、ウィベルトはジェラルドをイングランド国王に対する反逆者であり、ウェールズ人の反乱を助長しているとの噂をまき散らし執拗に攻撃したとされる⁷⁰。このようなジェラルドへの反発は1180年代の後半に著しく増加したものである。イングランド王宮のジェラルドの政敵たちは彼のウェールズの血を徹底して叩いた。ジェラルドはウェールズ人のクォーターに過ぎなかったが、政敵たちにとってみればそれで十分だったのである。後に、ジェラルドはイングランド王宮に対する自らの嫌悪感を述懐している。また王宮への度重なる貢献にもかかわらずヘンリー2世やリチャード1世は自分に何も報いてはくれなかったと嘆いている⁷¹。こういった宮廷の人々の侮辱や、懸命な働きに対する報いのなさは、イングランド王宮への抜き難い敵意となって、1190年頃までにはジェラルドの中に大きく膨らんでいく。そして、そのことが王室の官吏を辞める第一の原因となっていったのは間違いないと思われる。

もはやジェラルドのイングランドの地で司教になるという夢は、潰えてしまった。もともと、彼のそんな夢は実現不可能だったのかもしれない。ジェラルドはイングランド側にとって利用価値があっただけだった。領土欲に燃え、しばしばイングランド王権をも無視するノルマン・マーチャーと、反乱を繰り返すウェールズ人を牽制するために、その双方へ血の繋がりをもつジェラルドは恰好の持ち駒ではあっても、王室官吏として厚く信任し、ましてや国王の膝元イングランドで司教を任せるには、まさにその双方の繋がりゆえ、あまりにも危険だった。いまやジェラルドは著しくイングランド王権に対して敵意を強めている。そして、ジェラルドが2度目のセント・デーヴィッツの司教選挙に立候補し、その闘いの過程で彼はさらに質的な転換を見せる。ウェールズ人としてのアイデンティティをついに抱くに至るのである。

2-4 意識変化：第3段階（1194-1203）

この第3段階は、彼の人生のハイライトともいえる時期である。1194年頃までは、ジェラルドはウェールズ人はよく知っているが、彼らには何の好意も抱

いていない。だが、セント・デーヴィッツの第2回目の司教選の期間(1198-1203年)を通して、彼は劇的に変わる。わけても1199年以降、ジェラルドはセント・デーヴィッツのカンタベリーからの独立を叫ぶ闘士として、さらにはウェールズ全土の大司教を目指す人物として歴史の表舞台に登場してくる。そしてイングランド国王や、1190年に死んだボードウィンの後任としてカンタベリー大司教になったヒューバート・ウォルターと激しく対立する。ちなみに1199年には、ジェラルドはセント・デーヴィッツの聖堂参事会で司教に推挙されている。つまり、セント・デーヴィッツの意思としては、ジェラルドを司教にする方向で固まっている。そして、ついにジェラルドは、ウェールズ人こそ我がブリテンの民族であり、自分はまぎれもないウェールズ人であると宣言するに至る⁷²。この6年間続いた2度目の司教選を通じて、彼は、ウェールズ人のアイデンティティを獲得するのである。

ただ残念なことに、ジェラルドのウェールズ人に対する親近感の成長過程を、彼が王室の官吏を辞めた1194年から克明に追うのは、この間の史料の欠如により困難とされている⁷³。しかし、彼の心情の変化の道筋は、おおむね提示することができる。推察できるのは、ベルナルドが半世紀前に提起したセント・デーヴィッツの大司教区問題について、ジェラルドは1199年までに精力的に学び、その意義を真に理解したに違いないということだ。もちろん彼はセント・デーヴィッツが、かつてはウェールズの大司教の総本山であったという古い伝説を以前から知っていたし、そのことを自身の著作 *The Journey through Wales* に書きもしている。しかしこの2度目の司教選に臨むまでは、彼はこの問題に心奪われることはなかった。ゆえにジェラルドがウェールズ人へ接近し、ついにはウェールズ人としてのアイデンティティを抱くようになるのは、このセント・デーヴィッツの大司教区問題の正当性を理解し、その結果1人の聖職者として、古より大司教の威光輝く地としてのウェールズへの意識を新たにすることが大きいと考えられる。そしてそれによって、これまでは自分の高貴な側面、つまり王族との繋がりという個人的なごく狭い面だけのウェールズとの関係を誇ってきたものが、大司教区問題に啓発されたことで、ウェールズ全体というより普遍的なものへ誇りが質的に転化していったせいかもしれない。

加えて、ジェラルドのウェールズへの接近は、彼が宮廷から引退してほどなく世に出し、イングランド王室とカンタベリーからの完全な決別と敵対関係対をもたらしたといわれている、*Life of Geoffrey, Archbishop of York* という論文であったとされる⁷⁴。ジェフリーはヘンリー2世の最年長の庶子で、晩年にはヨークの大司教になった人物だが、野心家だったため政敵も多かったとされ⁷⁵、イングランドの最高司法官ヒューバート・ウォルターも、そんなジェフリーの政

敵の1人だった。ヒューバートは、第三次十字軍に同行して1190年11月19日の中東アクレ(Acre)攻撃のときに戦死したボードウインのあと、しばらく空位になっていたカンタベリー大司教の座を1193年から兼ねるようになる。この*Life of Geoffrey, Archbishop of York*の中で、ジェラルドは当時まだ存命していたジェフリーの行動や人となりを称え、一方でジェフリーに敵対してきた人々を弾劾する。恐らくジェラルドは宮廷で孤立した自分の姿とジェフリーの生き方を重ね、大きな共感を抱いたのだろう。何れにせよ、これは、ジェラルドを中傷したイングランドの宮廷人に対する仕返しだったとすることができるが、現実に生きている人々への痛烈な非難を下した書き物は、当時では極めて異例で、そのジェフリーの敵対者としてジェラルドに名指しされた者の中に、ヒューバート・ウォルターがいた⁷⁶。当然この論文への反発は凄まじく、ジェラルド2度目のセント・デーヴィッツ司教選におけるヒューバート・ウォルターの尋常ならざる敵意は、まさにここに出発していたといえるのかもしれない。

もう一つジェラルドがウェールズ人へ接近していった要因として指摘できるのが、武器を持って立ち上がったウェールズ人に対して下されたカンタベリー大司教の破門の乱用である。ジェラルドは政治的な目的のために、教会がこの破門という最強の精神的武器を使うことを非難している。ジェラルドは、ウェールズ人が反乱を起こすのは防衛であること、つまり自分たちの体や土地、そして自由を侵略者ノルマン人から守るためだということを次第に気が付いてきたものと思われる⁷⁷。もっともジェラルド自身、かつてはセント・デーヴィッツの教区で教会改革運動を強力に推し進めていた頃は破門を威嚇に使っていたのであり、彼の言動には自己矛盾や一貫性の無さが終始つきまとう。

2-5 ウェールズ人ジェラルドへ

ジェラルドの2度目の司教選は6年という長い年月に及んでいる。これは、セント・デーヴィッツの僧たちとジェラルドが共同して事にあたりに、教皇をも巻き込んだ効果的な戦術で臨んだ結果だろう。ではなぜ教皇を巻き込んだのか。そのねらいは、カンタベリー大司教ヒューバート・ウォルターの横槍を防ぎ、ジェラルドの司教への、そして最終的には大司教への叙任を合法的に進めることにあった。ジェラルドのこの2度目の闘いは、ウェールズのイングランドからの教会的独立を達成し、ベルナルドが半世紀前に目指したように、ジェラルド自身がウェールズの大司教になることを目的にしていた。しかし、ジェラルドにはベルナルドと比べて決定的な違いがあった。それはベルナルドがウェールズの大司教になろうと思ったとき、彼はすでにセント・デーヴィッツの司教だった。これに対し、いくらセント・デーヴィッツの僧職による参事会で選ばれたとはいえ、ジェラルドはイングランド国王やカンタベリー大司教に承認さ

れた「正式」な司教ではなかった。従ってジェラルドは、まず教皇に直接司教への叙任を請願し、その次にウェールズの教會的独立を果たすため、大司教への叙任を申し出なければならなかった。要するにジェラルドは教皇に2つのことをほとんど同時に願ひ出る必要があったのである。教皇にとってみれば、これは確かに面倒なことではあつただろう

他方、ヒューバート・ウォルターにとってみれば、ジェラルドがセント・デーヴィッツの司教になることは当然受け入れられない話である。だが最悪のケースは、ジェラルドが大司教になってしまうことだった。こうなると、達成されたウェールズの教會的独立が、さらに、ウェールズ人の反乱に火を注ぐことになり、その結果ウェールズのイングランからの政治的独立へと繋がりがかねない。そのことを恐れていたヒューバートは、ゆえにジェラルドとの闘いで風向きが思わしくなかった初期の段階では、ジェラルドが大司教になることを放棄するのなら、セント・デーヴィッツの司教として承認しようといった取引を持ちかけたとされている⁷⁸。だが、ジェラルドはこの妥協案を一顧だにせず、ウェールズの大司教となってイングランドからの教會的独立を果たすために邁進する。面子をつぶされた恰好のヒューバート・ウォルターは、それゆえ怒りの火球となってジェラルドの前に立ち塞がるのである。

1196年6月、セント・デーヴィッツの参事会は満場一致でジェラルドを司教に選出すると、教皇インノケンティウス3世にジェラルドの司教への叙任をしてもらうべく、彼をローマに送る。ジェラルドの、この司教叙任請願のためのローマ行は生涯のうちにも及び、ベルナルドのそれをも上回る。一方、教皇インノケンティウス3世は、ジェラルドの主張に共感を示していたといわれている。ただ、教皇はこの問題を考慮するために、セント・デーヴィッツがかつて大司教を擁していた教会であつたことを信じるに足る証拠、例えば歴代の教皇から教会セント・デーヴィッツに与えられた特権といったものを証明するものを要求し、そのためにジェラルドが教皇庁の記録庫を調べるのを許可するという好意を見せる。ジェラルドはそこで、前述のベルナルドのところで見してきたエウゲニウス3世がカンタベリー大司教テオバルドに宛てた1147年6月29日付の手紙の写しを発見する。それにはセント・デーヴィッツがカンタベリーに從属すべき教会であるということを、明らかに未決定の問題として残すと記してあつた。そしてジェラルドがローマからセント・デーヴィッツに戻り教会の記録庫を探してみると、エウゲニウス3世のその手紙のオリジナルと、ベルナルドが集めたこのセント・デーヴィッツ大司教区問題に対するさまざまな文書が出てきたのである⁷⁹。まさにこの頃はジェラルドにとって2度目の司教選という闘い—もはや、大司教への闘いといった方がいいかもしれない—の

ピークであり、ほとんど勝利を収めそうな勢いだった。

だが、カンタベリー大司教ヒューバート・ウォルターは政争経験豊富な、したたかな相手であり、勝つためにあらゆる手を講じていく。彼はジェラルドが最も頼りとするマーチャー一族に、手を引くようにと破門の脅しをかけて揺さぶる。強く抵抗したジェラルドの長兄フィリップ・ド・バリは、ついには破門されたと伝えられている⁸⁰。ジェラルドを満場一致で推したセント・デーヴィッツの聖職者たちに対しては、他の教区のものより高い地位を約束したり、ときには賄賂を与えるといった買収作戦でその団結を切り崩していった。リチャード1世の不慮の死（1199年）によってイングランドの王位についてジョンにも、ヒューバート・ウォルターは強い影響を及ぼし始める。ジョンはジェラルドと一緒にアイルランドを訪れるなど、彼をよく知っており、もともとは彼に反感を抱いていなかったとされる。ジェラルドに司教職を4回も申し入れたのも彼の教会人としての高い学識に敬意を払っていたことの表れだろう。だから、セント・デーヴィッツの参事会が派遣した使者の一行が、ジェラルドを司教として指名する旨の承認を求めるため海を渡り、フランスのシノンに居を構えるイングランド国王に会いに来たときも、ジョンは好意的に彼らを迎え、ジェラルドが司教の座に就くことに暗黙の承認を与えたとされる⁸¹。しかしそのジョンの態度もヒューバート・ウォルターの影響によってほどなく変わり、ジェラルドに対して敵意を抱き始める。そしてジェラルドを助ける者は誰であれ玉座の敵であると宣言するようになる。ジョンは日常的にジェラルドを反逆者と呼ぶようになり、ついには1203年に、王の威厳を軽んじ平和を乱す王国の敵、と宣言するに至るのである⁸²。

ジェラルドは、この2回目のセント・デーヴィッツ司教選の終わり頃までに、完全にウェールズ人と同化してしまったと思われる。闘いの最後は、ウェールズの君主たちがジェラルドの中心的な支持者となる。初期においては、マーチャーやセント・デーヴィッツの聖職者たちがジェラルドの支持者だったが、もはや彼らはヒューバート・ウォルターによって切り崩され沈黙している。そんなジェラルドの最後の作戦が、ウェールズの君主たちからの手紙を携えて教皇インノケンティウス3世に訴えるということだった。手紙には、セント・デーヴィッツの大司教区問題でジェラルドが展開した論点の全てが記されており、表向きはウェールズ君主たちが連名で教皇に宛てた形とはなっていないが、その草稿をジェラルドが書いたのはほぼ間違いないとされる。この手紙が重要なのは、強欲でウェールズの習慣や言葉を理解しない司教ばかりをカンタベリー大司教がウェールズに送り込んでくることを取り上げ、ウェールズ語を理解しない人間はウェールズの司教になるのに値しないとジェラルドが指摘している

点である⁸³。ジェラルドはウェールズの司教になろうとする者は、ウェールズ語を話せなくてはならないとする考えを固めていた。つまり、言語こそアイデンティティの核であると、彼は明確に認識するようになっていた。ジェラルドがこの闘いの終り頃までに、ウェールズ語を著しく上達させていたことはほぼ確実とされている⁸⁴。以前は、ジェラルドはウェールズ語を喋るのを嫌がり、それを喋る人々を軽蔑さえしていた。ウェールズ人と同化したいという彼の姿勢のみならず、この闘い勝ちたいという彼の強い情熱を示すものとして理解できよう。こんなジェラルドを、ウェールズ中東部ポウイス (Powys) の君主グエンウィンウィン (Gwenwynwyn) は賞賛の気持ちを込めて次のように語っている。

わがウェールズは、しばしばイングランドと大きな戦いをしてきた。

しかし、この我らの時代に、セント・デーヴィッツが司教に選んだ者によってなされたものほど、偉大で、真剣なものはない。彼は、国王と、大司教と、聖職者全員とイングランドの人々を攻撃し、悩ますことを止めなかった。その、決して萎えることのない情熱で、ウェールズの榮譽のために⁸⁵。

ジェラルドの、ウェールズ人であるという自己認識は、まさにこうした状況の中でピークを迎えていく。そして、彼はさらに語気を強めついにはこう叫ぶのである。

わがブリテンの人民—それは今や Welsh と悪しく呼ばれている—は、絶え間なき反撃でノルマン人やサクソン人から自由を守り、その力と武器でついに奴隷の頸木を取り払うに至った⁸⁶。

ジェラルド・オブ・ウェールズはついウェールズ人と同化した。

2-6 敗北

セント・デーヴィッツの司教選にかける凄まじいまでの情熱と、教皇インノケンティウス3世の好意と6年間という長い闘いの年月にもかかわらず、ジェラルドは最終的には敗れてしまう。それは皮肉にも教皇自身の決定だった。インノケンティウス3世はイーリーとウスターの司教へ手紙を出し、この問題の決定を表明した。手紙には延び延びになっているセント・デーヴィッツの選挙を両司教に監督するようにと促し、セント・デーヴィッツの司教には適切な人物が選ばれ、カンタベリーにて叙任されるべきことが記されており、セント・デーヴィッツの大司教区問題については何一つ記述がなかった⁸⁷。

教皇のこの決定の背景には、教皇がセント・デーヴィッツのほかにも、当時もう一つ巻き込まれていた別の選挙戦、ドイツ国王をめぐる選挙問題が強く影響していたものと考えられる。もともと教皇庁はドイツ国王フリードリヒ1世(在位：1155-1190)のイタリア圧迫政策に警戒感を強めており、その後継者ハイン

リヒ6世のシシリー併合には危機感を抱いていた。このフリードリヒ6世の夭折後、王弟シュヴァーベン太公フィリップ (Philip of Swabia) と、フリードリヒ1世によってイングランドに追われたハインリヒ獅子公の子オットー (Otto of Saxony) の両者が、それぞれを支持する勢力によって国王に選ばれる。二重選挙による混乱状態がドイツに出現するのだが、王位継承の正当性の面では、フィリップに分があるのは明らかである。だが、フィリップは兄のハインリヒ6世のシシリー政策継続を主張し、教皇側にとってはドイツ国王になってほしくない人物である。ゆえに教皇インノケンティウス3世はオットーを強く推す。このオットーは、イングランド国王ジョンの甥だった。教皇がオットーを推すことはまた、大陸政策に影響力を持つイングランド国王の強い後ろ盾が得られることでもあり、教皇側にとっては好都合だったといえる。従って、セント・デーヴィッツの件で敢えてジェラルドの主張を受け入れ、ジョンの印象を悪くすることは、オットーを推す上での共同戦線に亀裂が入ることになり、教皇庁の利益にならない。こう教皇は計算したと推察できる⁸⁸。教皇は一教会人としてはジェラルドを理解できた。しかし、現実の政治的な事情から、彼を見放したのだらう。

ジェラルドにとっての不運は、ヒューバート・ウォルターという、この上ないしたたかで策略に富んだ難敵と闘わなければならなかったことだ。だが、このカンタベリー大司教が立ち塞がったから、ジェラルドが勝てなかったわけでは決してない。ジェラルドが敗れた真の理由は当時の国際情勢であり、パワーポリティクスの結果だった。だから例えカンタベリー大司教がもっと柔和な人物だったとしても、ジェラルドはやはり勝てなかったに違いない。

結論

ジェラルドが2度目のセント・デーヴィッツの司教選を闘っていく過程で抱くに至ったウェールズ人としてのアイデンティティは、その後長く残ってはいなかったといわれる。司教選に敗れ、ウェールズの教会的独立を達成するという情熱が消え去っていくのと共に、彼のウェールズ人としての自己認識も消え去ってしまったかのようである。1203年以降、ジェラルドはイングランドのリンカンに隠棲し、学問に耽ることによって身を慰めながら1223年に没する。彼のウェールズ人に対する醒めた意見は、1203年以降に書かれた彼の書物の中に散見できるという。隠棲後のジェラルドは、ウェールズ人に対する情熱を見る限りは、何の共感も抱かなかった2度目の司教選前の状態に戻ってしまったかのようだ。彼のこの変わりようについてはいくつかの理由が考えられるが、一説によればジェラルドは元来がコスモポリタンで、彼にとっては故郷のウェールズの町にいるよりも、パリやロンドンにいるほうが快適だったのだという⁸⁹。もしそうな

ら、ジェラルドがウェールズ人に共感し、同化していったのは司教選を闘い抜くための味方を得る単なる戦術、計算とみなすこともできよう。

しかし、これは説得力のあるとらえ方とは思えない。もし単なる戦術なら、ジェラルドは言語がアイデンティティの核であると認識して、積極的な態度でウェールズ語を学ぶ姿勢は持たなかっただろう。また、戦術や計算では、12世紀当時にブリテン島の西端ウェールズの地から、海を渡りアルプスを越えてローマまで、1度のみならず3度までも行けるものではない。肉体的な強さのみならず、精神的な強さ、信念がなければ成せる技ではないからである。むしろジェラルドについては、首尾一貫性を欠いていたと考えるほうがより適切だろう。すでに見てきたように、ジェラルドはセント・デーヴィッツの司教の座をめぐる2度目の闘いの直前まではウェールズ人を見下していた。しかしその司教選の最中に彼はウェールズ人に同化していき、そしてその後再び変わる。そのいずれの場合もジェラルドは本気であり、自分に正直だった。要するに考え方が場あつち的で一貫性がないのである。

しかし、こうした首尾一貫性の欠如は、多かれ少なかれ混血の、つまりウェールズやイングランドの地において征服者階級を形成していたノルマン—ウェルッシュ、あるいはアングロ—ノルマンといった2つの血を持つ人々の宿命だったのだろう。なぜならば、彼らは一様にウェールズ人でもありノルマン人でもあるという、アイデンティティ上のジレンマを抱えていた。こうした混血ゆえのジレンマを抱える人々は、自分たちの精神のルーツを求め、その2つの血の狭間で揺れ、思考の行き来を繰り返すものである。しかし、このような動揺は永遠には続かない。結局のところ、好むと好まざるとにかかわらず、征服者は被征服地で圧倒的多数を形成している土着の人々と混血し、同化していかざるを得ない。もし、征服者がそこでの永久なる定住を欲するならば、だ。そして実際、ウェールズに侵攻してきた征服者ノルマン人は、この地に定住する以外に道はなかった。このことは必然的にノルマン人をその地のネイティブ、つまりウェールズ人としてのアイデンティティを抱かせる道に導いて行く。

ジェラルドの場合は、このような例、即ち征服者階級に属する人々が陥ったアイデンティティの危機と、その次に来るネイティブへの同化といった現象を考えると、一つの事例としてとらえられる。それはいうならば、征服者階級のある一人の人間が、一歩だけ先に勇気を持って土着のウェールズ人の方に進んだ。しかし、すぐにまだ純粋な征服者ノルマンの血を保っている者たちに、寄ってたかって苛められ叩かれてのびてしまったという歴史の一つの出来事だったと表現してもよい。実際にジェラルドは、ノルマン人のブリテン島のネイティブへの同化という歴史の流れの中で、早い段階でウェールズ人に同化して

いったのである。

征服した側の民族としてのアイデンティティの危機と、それに続くネイティヴとの同化は、ブリテン島において次第に一般的な現象となっていく。ジェラルド・オブ・ウェールズは、一步だけ、他のノルマン人の先を行ったのだ。ゆえに、本論で述べてきたジェラルドのケースは、母国である大陸フランスとの精神的絆を断ち、やがてブリテン島に住む民族として、「ブリティッシュ・アイデンティティ」を獲得するに至る征服者ノルマン人の変化の、「起源」と見ることができよう。そして、ジェラルドのウェールズ人に対する感情の一貫性の無さ、つまり彼自身の民族や文化の拠り所をめぐる混乱は、全体として見れば、この12世紀のブリテン島に次第に現われてきた征服者のルマン人のアイデンティティ・クライシスの、一つの反映にほかならない。

【注】

- ¹ R.W. Southern, 'England's First Entry into Europe', in *Medieval Humanism and Other Studies* (Oxford, 1970), pp. 135-57 (p. 137).
- ² 'England's First Entry into Europe' p. 142.
- ³ R.R. Davies, *Domination and Conquest: The experience of Ireland, Scotland and Wales 1100-1130* (Cambridge, 1990), p. 3.
- ⁴ *Domination and Conquest*, p. 67.
- ⁵ K.O. Morgan ed., *The Oxford History of Britain, II* (Oxford 1984), p. 24.
- ⁶ T. Jones trans, *Brut y Tywysogyon or The Chronicle of the Princes* (Cardiff, 1952), p. 20.
- ⁷ R. Bartlett, *Gerald of Wales 1146-1223* (Oxford, 1982), p. 14.
- ⁸ A.D. Carr, *Medieval Wales* (New York, 1995), p. 37.
- ⁹ Ibid. p. 37.
- ¹⁰ D. Walker, *Medieval Wales* (Cambridge, 1990), p. 44.
- ¹¹ L. Thorpe, trans., 'The Description of Wales', in *Gerald of Wales: The Journey through Wales and The Description of Wales* (London, 1978), pp. 211-74 (p. 260).

'They may not shine in open combat and in fixed formation, but they harass the enemy by their ambushes and their night-attacks. In a single battle they are easily beaten, but they are difficult to conquer in a long war, for they are not troubled by hunger or cold, fighting does not seem to tire them, they do not lose heart when things go wrong, and after one defeat they are ready to fight again and to face more the hazards of war.'
- ¹² W.L. Warren, *Henry II* (London, 1973), p. 158.
- ¹³ *Henry II*, pp. 159-60.
- ¹⁴ L.W. Rowlands, 'The Making of the March: Aspect of the Norman Settlement in Dyfed', in *Proceeding of the battle Conference on Anglo-Norman Studies*, ed. R.A. Brown, III (Woodbridge, 1981), pp. 142-57 (p. 143).
- ¹⁵ J.E. Lloyd, *A History of Wales from the earliest times to the Edwardian Conquest*, II, 2nd edition (London, 1912), p. 503.
- ¹⁶ *Domination and Conquest*, p. 67.
- ¹⁷ J. Gillingham, *The Angevin Empire* (London, 1984), p. 24.
- ¹⁸ *Henry II*, p. 165.

-
- 19 *The Angevin Empire*, p. 24; *Henry II*, pp. 162-63.
- 20 *Brut y Tywysogyon*, p. 63.
- 21 *Ibid.*, p. 63.
- 22 *Domination and Conquest*, p. 69.
- 23 *Gerald of Wales*, p. 22.
- 24 *Henry II*, p. 165.
- 25 *Brut y Tywysogyon*, p. 19.
- 26 'The Making of the March' p. 142
- 27 *Ibid.*, p.144.
- 28 J.H. Round, 'The Origin of The Fitzgeralds' in *The Ancestor: A Quarterly Review of Country and Family History, Heraldry and Antiquities*, II (London, 1902), pp. 91-98 (p. 91).
- 29 'The Origin of The Fitzgeralds', p. 95.
- 30 L. Thorpe, trans., 'The Journey through Wales', in *Gerald of Wales: The Journey through Wales and The Description of Wales* (London, 1978), pp. 63-209 (pp. 148-49). 'The siege lasted a long time and those inside were greatly reduced and near the end of their tether. When they had hardly any provisions left, Gerald . . . created the impression that they were still supplied . . . he took four hogs, which was about all that they had, cut them into sections and hurled them over the palisade at the besiegers . . . he thought of an even more ingenious stratagem. He signed a letter with his own seal and had it placed just outside the lodging of Wilfred . . . the finder would imagine that it had been dropped accidentally by one of Gerald's messengers. The purport of the letter was that the constable would have no need of reinforcements . . . When this despatch was read to the Welsh, they immediately abandoned the siege and went home.'
- 31 *Gerald of Wales*, p. 20-21.
- 32 *A History of Wales*, p. 423; 'The Making of the March', p. 145.
- 33 *Domination and Conquest*, p. 11.
- 34 'The Making of the March', p. 147.
- 35 *Brut y Tywysogyon*, pp. 27-8.
'And that folk had come from Flanders, the land that lies the Sea of Britain, because the sea had overwhelmed the land and its bounds and had thrown sand all over the ground, so that the whole land was unfruitful(.....)therefore that folk came to beg of king Henry a place wherein to live and to dwell. And he sent them to Rhos.'
- 36 'The Journey through Wales', pp. 141-42.
'They are brave and robust people, but very hostile to the Welsh and in a perpetual state of conflict with them. They are highly skilled in the wool trade, ready to work hard and to face danger by land or sea in the pursuit of gain, and, as time and opportunity offer, prompt to turn their hand to the sword or ploughshare.'
- 37 *Domination and Conquest*, p.13; 'The Making of the March', p. 146.
- 38 *Brut y Tywysogyon*, pp. 41-2.
- 39 *Gerald of Wales*, p.13; 'The Making of the March', p. 147.
- 40 H.E. Butler, ed. and trans., *The Autobiography of Giraldus Cambrensis*, (London, 1937), p. 35.
- 41 *The Autobiography of Giraldus Cambrensis*, p. 35.
- 42 *Gerald of Wales*, p. 3.
- 43 *Ibid.*, p. 30.
- 44 *Ibid.*, p. 32.
- 45 *Ibid.*, pp. 28-9.
- 46 M. Richter, *Giraldus Cambrensis: The Growth of the Welsh Nation* (Aberystwyth,

1972), p. 5.

47 *Giraldus Cambrebsis*, p. 41.

48 *A History of Wales*, II, p. 486; 'The Journey through Wales', pp. 159-60 (footnote).

49 *Giraidus Cambrensis*, pp. 45-7.

50 *Ibid.*, p. 47.

51 *Ibid.*, p. 48; Walker, *Medieval Wales*, p. 72.

52 'The Journey through Wales', p. 12.

53 *Ibid.*, p. 14.

54 *The Autobiography of Giraldus Cambrensis*, p. 61.

'It is neither necessary nor expedient for King or archbishop that a man of great honesty or vigour should be Bishop in the Church of St. David's, for fear lest the crown of England or the See of Canterbury should loss thereby.'

55 *Ibid.*, pp. 61-2.

'The Archdeacon was not a safe man to set over the See of Mynyw, because he was akin by blood to Rhys, Prince of South Wales, and almost all the other great men of Wales; nor was it expedient by the promotion of such a man, so honest and such high birth, to give new strength to the Welsh and increase their pride.'

56 *Gerald of Wales*, p. 15.

57 *Ibid.*, p. 48; *Giraldus Cambrensis*, p. 90.

58 *Giraldus Cambrensis*, p. 90.

59 *Ibid.*, p. 90; *Gerald of Wales*, p. 48.

60 *Gerald of Wales*, p. 20.

61 *Ibid.*, pp. 22-3.

62 *Ibid.*, p. 23.

63 Carr, *Medieval Wales*, p. 52; Walker, *Medieval Wales*, pp. 12-13.

64 Walker, *Medieval Wales*, p. 76.

65 *Gerald of Wales*, p. 16.

66 'The Journey through Wales', p. 166.

'Canterbury enjoys royal favour, immense wealth, the services of a great number of suffragan bishops, who are, moreover, well endowed, and the presence of many learned men who are highly skilled in literature and the law. All these advantages are completely lacking St. David's, and no just consideration is ever given to its plight.'

67 'The Description of Wales', pp. 267-70.

68 *The Autobiography of Giraldus Cambrensis*, pp. 83-4.

69 *Gerald of Wales*, p. 15.

70 *Giraldus Cambrensis*, p. 88.

71 *Gerald of Wales*, p. 17.

72 *Ibid.*, p. 51.

73 *Giraldus Cambrensis*, p. 94.

74 *Ibid.*, p. 89.

75 十字軍に出かけた国王リチャード1世に後事を託されたウィリアム・ロンシャンが、権勢欲から国内の反乱を招き、大陸に亡命する1191年のイングランドの政変に、ジェフリーは深く関わっていたとされる。ジェフリー自身はロンシャンの画策によってフランスに一時移らざるを得なくなるなど被害者の側面があったが、その反ロンシャンの動きがリチャードと不仲の王弟ジョンと一時的に結びついて、この政変とその後のイングランドの政治に不安定要因を残したといわれる。従って、ヒューバート・ウォルターを始めとするリチャード1世の留守を預かる家臣たちにとっては、ジェフリーはロンシャンを追い出すための一時的な味方ではあっても、気を許せる存在ではなかった。参考:B.Frank, *The Feudal Kingdom of England 1042-1216* (Longman, 1988), pp. 372-77.

- ⁷⁶ *Giraldus Cambrensis*, p. 89.
⁷⁷ *Gerald of Wales*, p. 53.
⁷⁸ *Giraldus Cambrensis*, p. 116.
⁷⁹ *Ibid.*, p. 113; Walker, *Medieval Wales*, pp. 77-8.
⁸⁰ *Giraldus Cambrensis*, p. 131.
⁸¹ Walker, *Medieval Wales*, p. 77.
⁸² *Giraldus Cambrensis*, p. 118, p. 123.
⁸³ *Gerald of Wales*, p. 55.
⁸⁴ *Ibid.*, p. 54.
⁸⁵ *Ibid.*, p. 56.
'Our Wales often wages great wars against England, but never anything as great and serious as has been done our time by the bishop-elect of St. David's. He has not ceased to attack and trouble the king, archbishop, and the whole clergy and people of England as well, with long and sustained efforts, for the honour of Wales.'
⁸⁶ *Ibid.*, p. 56.
'Our British people (now wrongly called Welsh), defend their liberty against both Norman and Saxons by continual rebellion, have thrown off the yoke of servitude from their necks, even up to today, by strength and arms.'
⁸⁷ *Giraldus Cambrensis*, pp. 122-23.
⁸⁸ *Ibid.*, p. 118.
⁸⁹ *Ibid.*, p. 81.

参考文献

- Barlow, Frank, *The Feudal Kingdom of England 1042-1216*, 4th edition, (Longman, 1988)
- Bartlett, Robert, *Gerald of Wales 1146-1123* (Oxford, Clarendon Press, 1982)
- Butler, H. E., ed. and trans., *The Autobiography of Giraldus Cambrensis*, C.H. Williams, with intro. (London, Jonathan Cape Ltd, 1937)
- Carr, A. D., *Medieval Wales* (New York, St. Martin's Press, 1995)
- Davies, John, *A History of Wales* (London, Penguin books Ltd, 1994)
- Davies, R. R., *Domination and Conquest : The experience of Ireland, Scotland and Wales 1100- 1300* (Cambridge, Cambridge University Press, 1990)
- Gillingham, John, *The Angevin Empire* (London, Edward Arnold Ltd, 1984)
- Jones, Thomas, trans., with intro. and note, *Brut y Tywysogyon or The Chronicle of the Princes* (Peniarth MS.20 Version), Board of Celtic Studies, University of Wales History and Law Series, XI (Cardiff, University of Wales Press, 1952)
- Lloyd, John Edward, *A History of Wales from the earliest times to the Edwardian Conquest*, II, 2nd edition (London, Longman, 1912)
- Morgan, Kenneth O., ed., *The Oxford History of Britain*, II (Oxford, Oxford University Press, 1984)
- Richter, Michael, *Giraldus Cambrensis: The Growth of the Welsh Nation* (Aberystwyth, 1972)

-
- Round, J. Horace, 'The Origin of The Fitzgeralds' , in *The Ancestor : A Quarterly Review of Country and Family History, Heraldry and Antiquities*, II (London, Archibald Constable & Ltd, 1902), pp. 91-8.
- Rowlands, I. W., 'The Making of the March : Aspect of the Norman Settlement in Dyfed' in *Proceedings of the Battle Conference on Anglo-Norman Studies*, ed., R.A. Brown, III (Woodbridge, The Boydell Press, 1981), pp. 142-57.
- Southern, R. W., 'England's First Entry into Europe' in *Medieval Humanism and Other Studies* (Oxford, Basil Blackwell, 1970), pp. 135-57.
- Thorpe, Lewis, trans. and intro., 'The Journey through Wales', in *Gerald of Wales : The Journey through Wales and The Description of Wales* (London, Penguin Books Ltd, 1978), pp. 63-209.
- Thorpe, Lewis, trans. and intro., 'The Description of Wales', in *Gerald of Wales : The Journey through Wales and The Description of Wales* (London, Penguin books Ltd, 1978), pp. 211-74.
- Walker, David, *Medieval Wales* (Cambridge, Cambridge University Press, 1990)
- Warren, W. L., *Henry II* (London, Eyre Methuen Ltd, 1973)